

くらしの良品研究所の活動

「眠り」について研究中



2011年は2回にわたって「眠り」のアンケートを実施しました。多くの方が、「寝つき」や「目覚め」の悩みを持ち、日々工夫をされています。就寝時刻が遅いことによる睡眠不足が大きな要因ですが、夕食の時刻や入浴時刻・方法にも関係性があるようです。次回の「くらし中心～no.7」では、「眠り」について深掘りをしてまいります。

www.muji.net/lab/project/sleep/

「ベランダ菜園」プロジェクト、次なるステージへ



2010年春にスタートした、「ベランダ菜園」プロジェクト。2011年は「緑のシェード」実験を連載ブログでご紹介し、東日本大震災後「節電」の意識が高まる中、多くの方からご意見やご質問を頂戴しました。3年目に入る2012年は、ゴーヤの栽培セットを発売予定です。来年こそは挑戦したいというみなさん、一緒に育ててみませんか。

www.muji.net/lab/blog/greenshades/

「こども自転車」の見直し、進行中



6月に実施した「三輪車」のアンケートでは、多くの方から貴重な意見をいただきました。座面（サドル）の耐久性や舵取り機能のついた押し棒など、商品の見直しを急ピッチで行っています。同時に、12型・16型のこども自転車も社内モニター試乗会などを実施。対応年齢の幅を広げスムーズな乗り継ぎをしていただくため、新車種の開発も行っています。

www.muji.net/lab/project/bicycle/

くらしの良品研究所とは

「くりかえし原点、くりかえし未来。」を合言葉に、これからの時代に求められる良品像を、みなさんと一緒に探っていく“ラボラトリー”です。店舗とインターネットを介して、生活者であるお客さまと対話しながら、既存商品を点検し、新しい商品を育て、世界のより多くの人々に「これでいい」と共感していただける、感じいい暮らしのかたちを考えていきます。

◇この小冊子は、背表紙に付いた2つのリングをファイルの穴に通して、ストックすることができます。

facebookを利用して、読者のみなさんからのコメントやご意見を公開。ユーザー同士のご意見交換も可能になり、たくさんのご意見を共有できるようになりました。

www.muji.net/lab

no.06

手渡すところ

無印良品



贈りものの起源は、神への供えものだとされます。日本には古代から季節の節目や祝祭で神を祀り、神への供え物をみんなで食べることによって神との結合を強めようという思想がありました。この「神人共食」が、人と人も含めた共食へ広がり、人々の間で食べものをやりとりする贈答という習慣につながったのだとか。贈りものが「分かち合い」と言われるのも、こんなところから来ているのでしょう。時代が進み、神への供えものという意識が薄れてからも、贈りもののやり取りは「手渡し」が基本でした。相手のために選んだものを自分が持参し、相手の顔を見て手渡す。「贈る」という行為に膨大な時間とエネルギーをかけていたことがわかります。そして、「つまらないのですが…」と手渡す奥ゆかしさの裏側で、日本人は贈りものの包みや飾りにまで工夫を凝らし、日本的な美意識で磨き上げてきました。風呂敷や包み紙、水引、木や竹でつくった箱など、用と美を兼ね備えたそれらのものは、受け取る人への想いをカタチにしたもの。気持ちを伝えるために、いつの時代も、人はさまざまに心をくだいてきたことがわかります。人と人との絆がよりいっそう求められている今。「贈りもの」の本当の意味を問い直す時期に来ているのかもしれない。

第6回
研究テーマ

手渡すところ

プレゼントとは「贈りもの」のことですが、「表現する」という動詞でもあります。愛情、感謝、挨拶、お祝い、喜び、祈り…さまざまな気持ちをあらわす手段として何かを贈るのであって、相手に届けたいのは「気持ち」です。その気持ちを、手渡すように伝えられたら、どんなに素敵でしょう。言葉を贈る、笑顔を贈る、夢を贈る、時間を贈る…ここでは、モノという枠を超えて気持ちを伝える贈りものについて考えてみたいと思います。

「居場所」を贈る。

もしかすると、子どもの誕生は、神さまからの贈りものかもしれません。
その喜びを地域で分かち合い、子どもたちの「居場所」をつくりたいという
想いから、生まれてきた子どもたちに椅子を贈る町があります。
名前や生年月日、シリアルナンバーなどが刻印された、世界に一つだけの椅子。
その小さな椅子は、日々の暮らしにそっと寄り添いながら、
それぞれの家族の物語を刻み、思い出の記憶装置となっていくことでしょう。



生まれてくれて、ありがとう。君の居場所は、ここにあるからね。

「君の椅子」プロジェクトが生まれたのは、今から7年前。
北海道・旭川大学大学院の小さなゼミ室での、小さな会話がきっかけでした。

「赤ちゃんが生まれると地域の人たちが1発の花火をあげて、その誕生を祝う町があるんだよ。お昼に花火があがると、教室で勉強している子どもたちが拍手をするんだ」ゼミの主宰者であり、地域政策のスペシャリストである磯田憲一教授は、学生たちにそう語りかけました。
花火をあげ続けてきたのは、人口3300人の小さな町、愛別町。昼時に響くその音は、新しい命の誕生を町の人たちに知らせる合図でもあります。1発の花火にこめられた温もりは、都会の夜空を彩る数千発の花火にも決して引けを取りません。そんな温かい地域コミュニティーがある一方で、児童虐待やイジメなど悲しいニュースが後を絶たない現代社会。自分の居場所を見つけることのできない子どもも増えています。「君の居場所は、ここにあるよ」というメッセージをこめて、地域で子どもの成長を温かく見守りたい。

そんな想いから、「君の椅子」プロジェクトがスタートしたのです。

「君の椅子」は、趣旨に共鳴した第一線のクリエイターが心をこめて描いたデザインをもとに、旭川家具のブランドを支える職人の技でつくられます。デザインは毎年変わり、座面の裏には子どもの名前や生年月日、ロゴ、シリアルナンバーが刻印されたオリジナルの手づくり椅子。素材として使われるのは道産の無垢材で、子どもたちが生まれた北海道の森で育った木々です。故郷の人々の想いと故郷の空気がたっぷり詰まった、世界でたった一つの椅子。この椅子を贈られた子どもたちの心の中には、「故郷」が大きな位置を占めていくことでしょう。

このプロジェクトに真っ先に賛同して、新しい町民の誕生を「君の椅子」で祝うことにしたのは、東川町でした。「最初に東川町が手を挙げてくれたのは、とても嬉しいことで

した。人との出会いに助けられています」磯田教授は当時を振り返り、東川町長との出会いや2006年に最初のデザインを担当した建築家・中村好文氏とのいきさつを懐かしそうに語ってくれました。
旭川市に隣接する東川町は、子育て支援も充実しており、道内外からの移住者が増えている町。「写真甲子園の町」としても有名です。何より驚くのは、2006年に51名だった出生児が2010年には69名と、自然増していること。「来年は、どんなデザインの椅子だろうね」こんな会話が、少子化の防波堤になっているのかもしれません。2007年からは絵本の町・剣淵町、2010年からは花火の町・愛別町も加わって、参加自治体は3つに。それぞれの町から、誕生したすべての子どもに、その年の「君の椅子」が贈られています。

2009年からは、地域の枠を超えて個人でも参加できる「君の椅子倶楽部」も始まり、2006年スタート以来516人

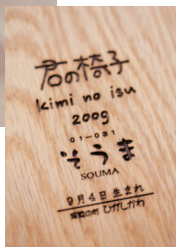
の赤ちゃんの元に「君の椅子」が届けられました。東川町では、町長自らが赤ちゃん誕生のお宅に出向いて椅子を手渡すなど、自治体ごとに工夫を凝らしてお祝いをしています。磯田教授も、「倶楽部」で参加した方に手渡すため、各地に何度か足を運んでいるとか。「赤字になるけど、ご参加いただいた方々や製作者の想いを考えると、宅配便で送るようなことはなるべくしたくない。親族はもちろん、ご近所の人まで出迎えてくれて…」と嬉しそうに語ります。たずさわったすべての人の想いが手渡され、共有される瞬間。そこでは「参加させてもらってありがとう」の声がこだまします。

今はまだ、子どもたちにこの椅子の意味はわからないかもしれませんが、子どもの成長に寄り添いながら共に過ごすこの椅子は、椅子としての役割にとどまらず、一つの「記憶装置」として生き続けていくでしょう。かつて家庭で、子どもの背丈を刻み記した「柱の傷」のように。



東川町で始まったプロジェクトは、2007年には剣淵町、2010年には愛別町が加わり、3つの町での取り組みとなりました。椅子の数は生まれた命の数でもあります。





自分で椅子を持ってきたら、「おなかが空いた」という合図。宗真くんの毎日には、この椅子が欠かせません。写真右は、座面裏の刻印。

第1回目の「君の椅子」を製作したのは、東川町で工房を営む木工作家・大門巖さんでした。そして第4回目の2009年、今度は息子の和真さんと親子で共同製作をすることになります。それまで別の仕事をしていた和真さんが、父の巖さんの元に戻って弟子入りして5年目のことでした。新しいプロジェクトを成功させるには「三つの者＝バカ者・若者・よそ者」が必要と言われます。この回のデザインを担当した小泉さんが、次世代の担い手として、和真さんに期待したのです。そして、その椅子のひとつは和真さんのお子さん、宗真くんにも贈られることになりました。当時、旭川市に住みながら工房に通っていた和真さんは、「町民としてこの椅子を受け取りたい」という思いから、赤ちゃん誕生を前に、東川町に移り住むことに決めたのです。和真さんのお宅にお邪魔した時は、2歳になった宗真くんが椅子に座ってシール遊びをしているところでした。「この椅子のある場所が自分の場所だと思っているようです」と和真さん。多くの人の思いが込められた「君の椅子」は、「僕の椅子」となって、ここにありました。



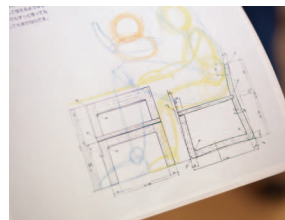
磯田 憲一
財団法人北海道文化財団理事長

旭川市生まれ。元北海道副知事。一貫して北海道人の視点で、地域力を活かしたさまざまな取り組みに関わる。2006年から、旭川大学大学院教授として学生と共に「君の椅子プロジェクト」を展開。



大門 巖・和真
木工作家

父・巖さんが設立した「アートクラフトバウ工房」で親子共に製作活動に励む。和真さんが目標とする巖さんは、ドイツミュンヘンでの1973年技能五輪国際大会で第3位受賞するなど、受賞多数。



小泉 誠 家具デザイナー
箸置きから建築まで、生活に関わるすべてのデザインを手がけ、全国のものづくりの現場を駆け巡る。

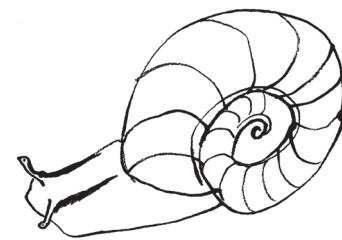


デザイナーに聞きました。

すぐに使えて、ずっと使える椅子。

赤ちゃんはすぐには座れないので、椅子が必要になるまで、しばらく時間がかかります。「この椅子はすぐに使ってほしいので、いろいろ工夫しました」そう語るのは、2009年の「君の椅子」を大門さん親子と共に製作したデザイナーの小泉誠さん。まずは、お母さんが楽な姿勢で授乳できるスツールになり、その後は子どもたちがお絵描きの机に使い、そして椅子に使う。子どもが大きくなったら踏み台として、年をとったら玄関先の靴脱ぎの椅子としても使えるように工夫されています。この椅子のもうひとつの特徴は、届けられた時点では完成品ではないということ。両親やおじいちゃん、おばあちゃんなど、家族でオイルを塗って仕上げをしてもらいます。「手をかけることは、心をかけること。多くの人が丹精込め、最後に自分たちで手をかけることによって、本当にかけがえのない椅子になる」と小泉さん。子どもはもちろん、家族の思い出も刻み込みながら、その椅子は、ずっと使う人の傍にあり続けるのでしょう。

「エール」を贈る。



3月11日の大震災が残した爪跡はあまりに大きく、被災地での復興は、なかなか思うように進んでいません。そんな中、たくさんの人が、被災地の人々に寄り添い、さまざまな行動を起こしています。津波で塩害にあった農地を復活させる「復興キャベツ」プロジェクトも、そのひとつ。農作業を通して農地や人を元気づけるその活動は、「社会的な贈りもの」と言ってもよいでしょう。



慣れない手つきで、一心不乱に苗を植え付ける参加者。右手には背丈以上の雑草が広がっています。

土も人も、キャベツで元気に。

津波で苗や作物が流され、瓦礫の山と化した田畑。作土がえぐり取られ、砂が上がって海水浴場の砂浜のようになってしまった畑。3.11の爪跡は、日本の農業を脅かしています。目に見えるものだけではありません。海水が引いた後も土壌に塩分が残り、作付けできない農地が広がっているのです。農家の中には耕作をあきらめる人も多く、震災前までの美しい田園は荒れ果て、人の背丈

以上の雑草が生い茂っています。そんな中、NPO法人農商工連携サポートセンターによって「復興キャベツプロジェクト」が立ち上げられました。海水に浸ってしまった畑の塩分濃度を下げ、都会のボランティアと交流しながら、農作物を植え、育て、販売する。普通に「農業」をすることで、農家と農地の自立をサポートしようとする活動です。



双葉の部分が土に埋もれないよう、深さを測りながら穴を掘り、慎重に植え付けます。

復興キャベツ。その第一歩は「塩トマト」から。

復興キャベツプロジェクトを語るには、塩トマトの話から始めなければなりません。それは約10年前の熊本県でのこと。海水に浸された畑でトマトを育てたところ、小粒ながら味の濃いトマトができて人気を集め、ブランド商品になったというものです。トマトは比較的塩分に強い作物だということがわかります。

これに注目したのが、農商工連携サポートセンター代表の大塚さんでした。うまく行けば、津波で塩害にあった畑でトマトが収穫できるかもしれない。それは、小さな赤いトマトから、被災地に生命のきらめきを取り戻そうとする試みでした。とはいえ、今回の津波は塩分濃度も桁外れです。塩トマトが育つところまで塩分濃度を下げたため、京都のベンチャー企業が開発した特殊なバクテリアで土壌改良をするなど、多くの人の力に支えられて、やっと植え付けまで漕ぎつけました。

50人近いボランティアを集めて宮城県岩沼市で600本の塩トマトを植えたのは6月4日。その後、すべての苗が人の背丈を超えるほど順調に育ち、たわわな実をつけ、8月20日に収穫ツアーを開催。翌21日には、東京京橋



苗の段階では、葉はまっすぐ。キャベツが結球するのは、土に植えて、もっと大きくなってからです。

植え付けも収穫も、岩沼市周辺では、この塩トマトが震災後初の農作物でした。参加したボランティアは、延べ95人。「瓦礫の撤去は無理だけど、苗の植え付けなら…」と参加したお年寄りや「自分からお母さんに頼んで家族ぐるみで来た」4歳の男の子などなど。被災地の痛みを分かち合い、自分にできる何かをしたいという気持ちが伝わってきます。震災復興への想いを込めて、大塚さんたちは、このトマトを「復興トマト」と名付けました。

ありがとう、こだまする。

トマトの収穫が終わると、続く第2弾として「復興キャベツプロジェクト」が動き出しました。植え付けをする農地は、宮城県仙台市四郎丸地区の野菜農家、伊深勝之さんの畑。名取川のすぐ上流にあり、海水が引いた後も塩分が残って作付けできない農地が広がっています。伊深さんも津波によって農地の2／3を失いました。「復興キャベツの話が来た時は、正直、半信半疑だった」と伊深さんは語ります。塩に浸かった畑で本当にキャベツが育つのか。たとえ育っても、放射性物質が検出されたら出荷できない。検出されなくても、風評被害の心配もある。キャベツの苗代の赤字が残るだけかもしれない。でも、こういう時だからこそ何かしたい。まず自分がやれば、それを見て周りの人も動き出すかもしれない。伊深さんは、復興キャベツに賭けてみることにしました。

植え付けツアーが行われたのは、震災からちょうど半年後の9月11日。東京、神奈川、愛知など、各地からやって来た23人のボランティアが伊深さんの畑に集まりました。農作業の経験者はむしろ少なく、キャベツの苗など見たこともない人がほとんど。畑には、塩分濃度を下げたためのバクテリアがすでに投入されていて、きれいに畝までつくられています。「遠くから来てくれるんだから」と伊深さんが事前に作業されたのでしょうか。そこだけ見ると、よく手入れされた普通の畑ですが、周辺は背丈以上の雑草がはびこった荒地。「このあたり一帯、70町歩（約70ha）あって、津波が来る前は美しい畑地だった…」伊深さんの言葉に胸が詰まります。用意されたキャベツの苗は、3000株。畝の上に手で穴を掘り、1株ずついねいに植えていきます。「そっとやさしく」「上から土を押さえずぎると、根っこが息できなくなるから」「苗に声をかけてやってな」要所要所で、伊深さんの「指導」が入ります。最初はおぼつかない手つきの人がほとんどでしたが、慣れていくうちにスピードアップ。約2時間の作業ですべての苗を植え終わり、多くの人の中に快い達成感が残りました。作業終了後の反省会。「こういう機会をつくってもらって、ありがとう」「参加させてもらってよかった」「被災地の人から力をもらった」など、会場は「ありがとう」の言葉で満



バクテリアで塩分濃度を下げた土と見事に熟した復興トマト。色ツヤを見ただけで、濃厚な味がわかります。



たされました。そして、「亡くなった人のことを思うと、頑張らねば。みなさんの手を借りて、負けないで頑張ってやりたい」と語る伊深さん。「近くに来ることがあったら、畑まで見に来てやってな。キャベツが喜ぶから」というさりげない言葉に、東北の人のやさしさと強さを見せられました。応援に出かけて行ったつもりで、逆に励まされ、たくさんの勇気をもたらったことを、参加者の多くが感じとったようです。



生産者と都市の消費者をつないで、月に一度、東京の真ん中で開催されている「ちよだ青空市」。全国の産地から出店されて生産者同士の交流の場となり、今回の被災地支援のきっかけにもなりました。



大塚洋一郎
NPO法人「農商工連携サポートセンター」代表理事

前経済産業省大臣官房審議官。農林水産業・加工・流通が連携を強めることで、魅力ある新しい製品やサービスをつくり出し、地域に活力を生み出す運動を展開している。

農商工連携サポートセンター
www.npo-noshokorenkei.jp/

こころを贈るとき

100万本のバラの花より、一輪の野の花の方が心に沁みることもあります。
贈りものが輝きを放つのは、贈る人のこころと贈られる人のこころが反応し合い、
ひとつに溶け合ったとき。その意味で、受け取る側のこころも
問われるのかもしれませんが。ここでは、アンケートにいただいた回答もご紹介しながら、
贈りもののさまざまなカタチを探ってみたいと思います。

chapter 01 | 手紙

「贈答歌」という言葉があるように、古代日本人にとっては、**言葉を歌にして**届けることが、そのまま贈りものでした。最初の
うちは声に出してうたわれ届けられたのですが、時代が進む
と紙にしたためられて手紙の形へ。平安貴族の世界では、歌の
内容だけでなく、文字の美しさや焚きしめられた香、添えられた
一輪の花まで、そのすべてが相手への「想い」を表現する手段と
なりました。手紙は、まさに贈りものの原点。モノがあふれる
現代だからこそ、「言葉」というシンプルな贈りものを見直して
みたい気がします。

放送作家の永六輔さんは、奥様が亡くなって十年たった今も、
仕事で旅に出ると奥様にあてた絵葉書を旅先から送り続けている
そうです。結婚記念日やお互いの誕生日に、何十年も手紙を出
しあっているご夫婦もあります。**幼いわが子が懸命に**
書いてくれた手紙は、「ありがとう」というひとことだけでも、親に
とってなにものにも代えがたい宝物になるでしょう。

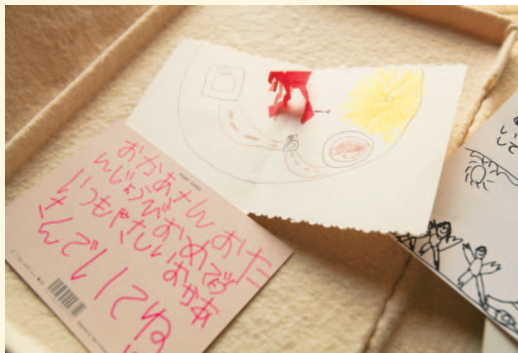
手書きが無理な場合は、メールだっていいかもしれません。
「毎年、結婚記念日に伯母から“今年もふたり仲良くね”というメー
ルが届く。憶えていてくれることが嬉しい」という人も。要は、
「贈るこころ」ひとつなのですね。



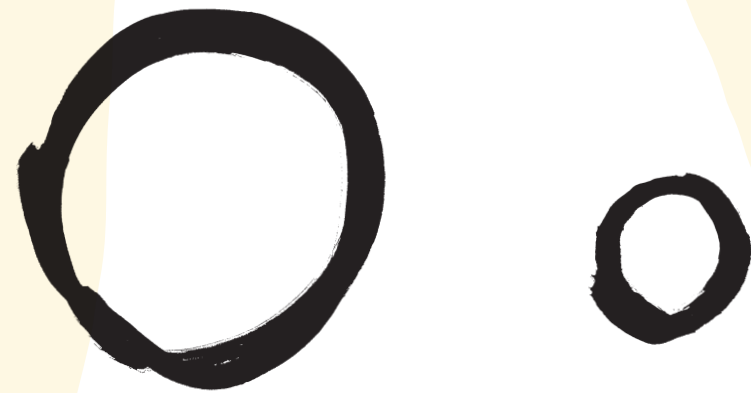
子供のころに両親に渡した手紙やプレゼン
トなどに添えたメッセージカード、手紙とはいえないメモのようなもので、30年経った
今でも母が保管していた。母の愛情の深
さを実感するとともに、両親に愛されている
証明のようにも思え、感謝と幸せを感じた。
(女性／30代後半)

初めての出産後自宅へ帰ったら、テーブル
の上に夫が描いた赤ちゃんの絵と「るみちゃん
は頑張りました。」という一言が添えら
れていた。夫の嬉しさが伝わり、私も嬉しく
なった。
(女性／50代前半)

誕生日やお正月。必ずお小遣いと一緒到手紙
を書いて渡してくれる祖父母。普段は気さ
くに方言まじりで話しているものの、手紙
の中では丁寧で上品な文章。自分は大切に
思ってもらえているんだと毎回嬉しい思いで
受け取っています。
(女性／20代前半)



chapter 02 | 親から子へ 子から親へ



贈りものの中でも、親子でのやりとりほど心に残るものはありま
せん。母の日や父の日に、幼い子どもから手渡された似顔絵や手
紙などを宝物のようにしまっている人は多いことでしょう。もらっ
たその時にうれしいのはもちろん、月日がたって見直した時には
わが子の成長過程を思い返すすがにもなり、しみじみとした喜び
を与えてくれます。手紙やプレゼントだけではなく、運動
会や学芸会で頑張っている子どもの姿、誕生日の歌声、もっと
言えば**日々の子どもの笑顔**こそ、親が受け取る最高
の贈りものなのかもしれません。

親から子どもへの贈りものとして、多くの人が思い起こすのは
「言葉」です。折節にかけられた言葉などはその場では意味がわか
らないことも多いのですが、ずっと後になって、**深い意味**
や**親の気持ち**がわかるということがあります。また、親元か
ら離れてひとり暮らしを始めてみると、たとえ普段は反発してい
る間柄でも、親から届いた手紙に素直になれるという人も多いよ
うです。多少の「距離感」が、親子間の気持ちのやりとりをスム
ースにしてくれるのかもしれませんが。

大切なものを**子どもに引き継ぐ**ための贈りものもあり
ます。来客用に大切にしまい込んでいた陶器の大鉢を持ち出して
きた90歳のお母さんから、「いろいろありがとう。あなたが使う
番よ」とあらたまって言われ、驚くと同時に感激があふれたとい
う体験を話してくれた人もありました。
子から親へ、親から子へ。贈りものが愛する人へ渡すものだとし
たら、親子間のそれは、贈りものの原点と言えるでしょう。

がん治療中の父が、主治医より余命が残り
少ないと宣告された時に、体調が良くない
にもかかわらずタクシーに乗って、こっそり
家族それぞれにプレゼントを買いに行ってく
れました。母、弟、私にそれぞれ。形見分け
のつもりだったと思います。私は腕時計を父
から贈られました。それから2ヶ月後に亡く
なりました。腕時計は毎日大事に使っていま
す。今もつけています。

(女性／30代後半)

私は誕生日には何か洋服やおモチャなど品
物が欲しかったのですが、母はいつもお赤
飯でした。母亡き今は、品物をくれる友人は
いますが、お赤飯を炊いてくれる人はいませ
ん。今では母の炊いてくれるお赤飯がとても
懐かしいです。

(女性／30代後半)

就職して初めてのお給料で父にイニシャル入
りのカフスをプレゼントした。数年後、私の
結婚式で父が「生涯で一番嬉しかった娘か
らのプレゼントをつけて、娘の結婚式に出
られる幸せ」をみんなの前で話したときは、
私も嬉しかったです。

(女性／30代後半)

双子の子供が10歳の頃父の日にくれた肩た
たき券、たしか10分券・20分券などがあっ
て1枚だけは使った覚えがあるが期限は無
期限となっていて、いまだに私の宝物箱にし
まっています。

(男性／60代以上)

心に残るプレゼントのアンケート結果
www.muji.net/lab/living/gift-report-111130.html

chapter 03 | 包む

贈りものを手渡す時、最初に目に留まるのは「包み」です。その昔、お中元やお歳暮が老舗デパートに集中していたのも、包装紙によるところが大きかったのでしょう。一方、どんなに高級なブランド品でも、店の包みのまま差し出すのは恥ずかしいと思う感覚もあり、そんな人たちはパッケージの上に何かを書いたり貼ったり巻いたり、**オリジナルな工夫**をしています。

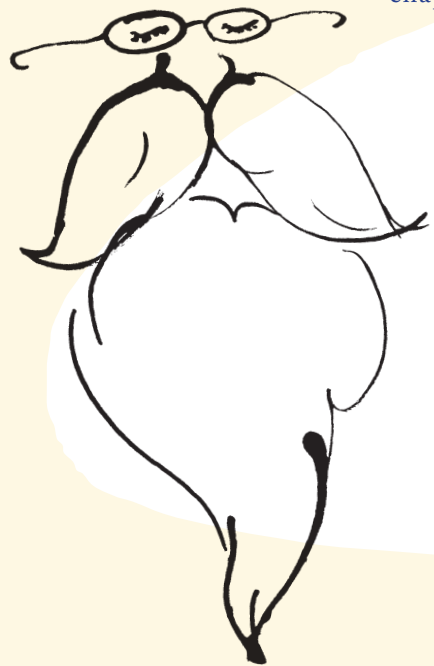
そもそも日本人は、「包む」という行為に美を見出し、繊細な文化として育んできました。風呂敷に包むのは、持ちやすさだけでなく、相手に届けるまで**大切に扱う**という気配りの証。進物用の包み紙などを結ぶ水引は、細い紙縫い(こより)に水糊を引いて乾し固めたもので、繊細な手仕事から生まれる美しさは驚くばかりです。そして風呂敷や水引には、目的に応じて、用と美を備えたさまざまな結び方も生まれています。「たった一つのもの」にするための現代的なパッケージングも、伝統的な様式美の包みも、贈りものに**気持ちを添える**という意味では同じ。目的に合わせて包みを考えるのも、贈る楽しみのひとつです。



出産祝いに、義姉からプレゼントの他にお下がりのベビー服をもらった。サイズごと、季節ごとに袋分けされて「来年の春ころかな」などメッセージ付き。手作りのラッピングがされていてとても嬉しかった。
(女性／30代前半)

小1のお誕生日。学校から帰るとデパートの包装紙にくるまれた箱が…。ワクワクしながら開けるとそこには欲しかったリカちゃん人形!祖父の友人のおじさんからのサプライズプレゼントでしたが、あまりの嬉しさに包装紙にも手アイロンをかけ、大事に取っておいた記憶が。
(女性／50代前半)

chapter 04 | サンタクロース



早めに用意したプレゼントを押入れや車のトランクに隠したり、イヴの日は子どもが目を覚まさないようにそっとプレゼントを置いたり。クリスマスプレゼントを渡すため、親はさまざまに苦心します。それもこれも、子どもの「**サンタの夢**」を壊したくないという一心から。それなのに、いつ頃からか子どもは「サンタの正体」を知ってしまいます。では、サンタクロースは本当にいないのでしょうか？
クリスマスの時期になると、世界中で語り継がれる有名な話があります。8歳の少女の「**Is there a Santa Claus?**」という投書に答えて1897年9月21日にニューヨーク、サン紙に掲載された社説です。

chapter 05 | サプライズ

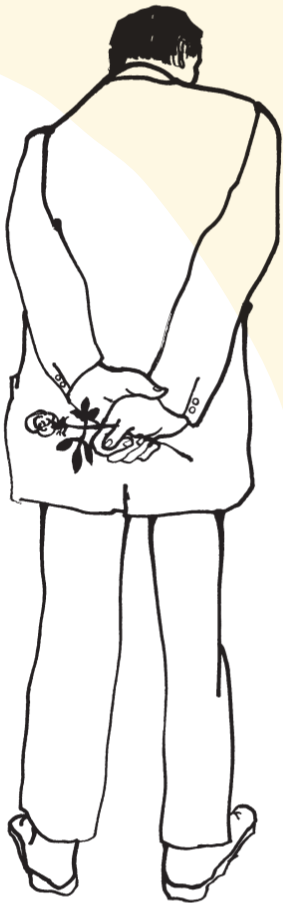
相手が驚き喜ぶ姿を想像しながら準備する時の、わくわく感、**どきどき**感。受け取る人にとってうれしいのはもちろん、贈る側にとっても楽しいのが贈りものです。相手に気づかれないようにとその当日まで隠しておく「サプライズ」となれば、**準備段階**での楽しさもひときわでしょう。

ある人から聞いた話です。誕生日の当日、ご主人は出張だと言っていたので、誘ってくれた友人と2人で旅行に出かけました。その旅先、バンガローに着いて一服していると、突然電気が消え、ハッピーバースデーの音が。見ると大勢の友人と一緒にご主人までもがそこにいたとか。その後はもううれしくて、涙が止まらなかったといひます。

こんな演出を伴う贈りものは、相手の驚き喜ぶ顔を見たいという純粋なところから発するもので、贈りものの原点とも言えるもの。サプライズを用意して彼女の誕生日を祝った人たちは、その場で彼女の**驚きと喜びを共有**して、幸せな気分浸ったことでしょう。

相手に気づかれないように周到な用意をして贈ることも、手渡すカタチのひとつです。本人に秘密でコトを進めるためには、担当を決めてみんなで協力し合い、当日を迎えるまで、それぞれが黙々と進めていったはず。人に喜んでもらうために費やした

時間やエネルギーそのものが、すでに贈りものになっていると言えるかもしれません。その一方、準備する過程で、たくさんの楽しみをもらっているのもしか。贈りものには、贈る人と贈られる人の両方を幸せにする力があるようです。



定年退職の日に、職員食堂へ誘われたら、そこが送別会の会場になっており、多くの部下、友人が集まって送別会を開催してくれた。
(男性／60代以上)

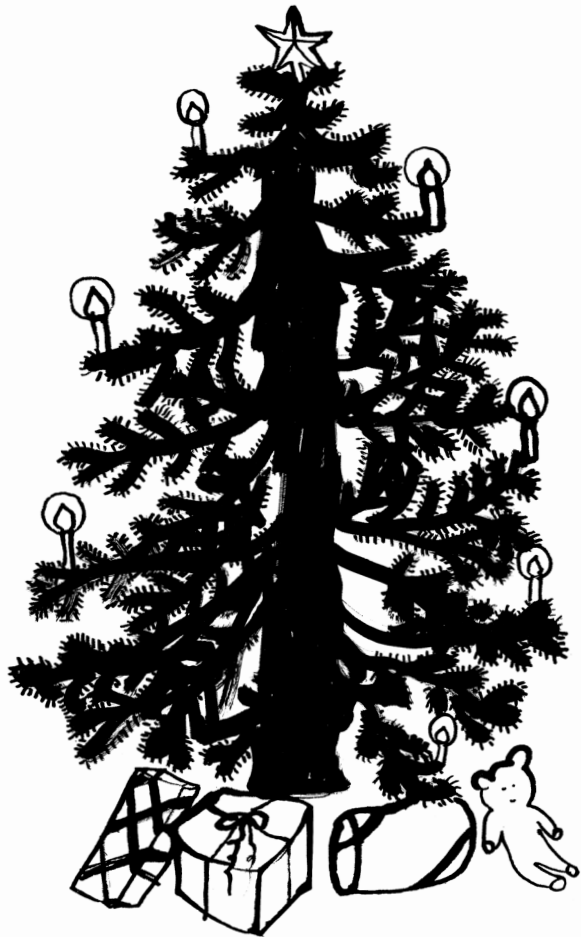
大学生の頃、バイトに原付で通っていました。バイトが終わって、原付に乗ろうとしたら、前カゴに、お花が1本。メッセージに、「バイトお疲れさん」の一言と彼の名前が。普段、花など買ってくれる人ではなかったし、記念日とかでもなかったの、とても感激しました。
(女性／40代前半)

サンタクロースが実在するかないかで友だちと意見を交わしたヴァージニアは、新聞社に手紙を出しました。「お友だちの中には、サンタクロースはいないという子がいます。…本当のことを教えてください。サンタクロースはいるんですか？」
「Yes, Virginia, **there is a Santa Claus.** (そうです、ヴァージニア。サンタクロースはいるのです)」という有名な一節を中心に、その社説は「いちばん**本当のものは見えない**のです」と語ります。そして、目に見えるものしか信じられない悲しさと、目に見えないものの確かさ、不変さとそれを信じることの素晴らしさも。この話は、贈りものに込められた想いを感じ取れるかどうかということにも、つながりそうです。

小さい頃のクリスマス。弟とわたしはサンタさんを信じていたので、親はあの手この手で欲しいものを聞き出し用意してくれたそうです。当日は家族でクリスマス会。ツリーだけ別の部屋にセットし(サンタさんはこっそりきてくれるから)、トランプやゲームに夢中になっている間に、どちらかが素早く置きに行ってくれたそう。親の筆跡ではない手紙もついていて、わたしはあやしみつつも小学校5年まで信じていました。毎年どれだけがんばってくれていたかと思うと、わたしの自慢のプレゼントです。
(女性／40代前半)

集うという贈りもの

「分かち合う」ことが贈りものの原点だとすると、分かち合うものはカタチあるものとは限りません。同じ場所にいて、ともに時間を過ごすことも、分かち合い。ここでは、「集う」という行為であらわす贈りものについて考えてみましょう。



集い、共に過ごす喜びを、分かち合う。

現在多くの人に受け容れられているクリスマスの習慣は、実はキリスト教以前にその起源を見出すことができます。古代ローマやケルトの国々では、12月中旬から25日にかけて、つまり夜が長くなる時季に、太陽の復活を願ってユニークな冬至祭が行われていました。人々は冬の寒さを吹き飛ばすかのように陽気にご馳走を食べ、贈り物をしあい、豊穡の証である常緑樹を飾りました。ヒイラギ(柊)やイチイ(一位)、ヤドリギ(宿木・寄生木)など、常緑樹の中でも冬に実をつける樹を選び、その枝を小さな花束にして贈る習慣もあります。この習慣は、ヨーロッパ各地に見られるもの。冬でも緑の葉を持つ

植物を永遠の生命のシンボルととらえ、魔除けや薬に用いる他、お互いの健康を祈って贈りものにしましたのです。

冬至祭の贈りものは、訪れる祖霊をご馳走でもてなしたことに由来し、次第に豊穡への祈りに結びついていったようです。そこには、寒さが増す季節に光の復活を願い、死者を悼み、自然に感謝し、人との絆を深めるなど、贈りものの原点とも言える想いが込められていました。その想いは、季節こそ違うものの、日本の「お盆」ともつながります。また、冬に実のなる常緑樹を尊ぶという点では、千両

ヨーロッパ／イチイ(上)、ヤドリギ(下)



や万両、南天などを飾る日本のお正月とも似ています。日本とヨーロッパ、遠く離れて通信手段もない時代に、双方に同じような習慣があったことに驚かされます。国や文化は違っても、自然の中での人の営みは、自然との関係性において同じような習慣を生み出していくのでしょう。

冬至祭をはじめ、日本のお盆やお正月に共通するのは、人が「集う」ということ。家族や親しい人と共に過ごす穏やかで楽しい時間こそ、古くから続く祭りの本質と言えるかもしれません。冬至祭が変化した西欧のクリスマスは、今も、家族が集い共に食事をする日とされています。お盆や年末に日本の高速道路が故郷へ向かう車で大渋滞するのも、「集う」という目的のため。コミュニティという意識が薄れ、人と人とのつながりが希薄になっている現代においては、「集うこと」それ自体が、贈りものと言えるかもしれません。ただ傍にいてあげるだけで、大きな贈りものになることだってあるでしょう。同じ場にいて時間を共有し、喜びはもちろん、悲しみすらも分かち合う。そんな贈りものの原点を、もう一度見直してみたいものです。

日本／千両(上)、南天(下)



ヨーロッパではユール・リースやブーケにして冬至祭の時に飾ります。日本では、しめ飾りや生け花にして正月を祝います。もともと冬に実をつける植物に豊穡や繁栄を祈願したもので、自然と人が共にあった頃の素敵な習慣です。

ATELIER MUJI

冬至祭 むすぶ、めぐる、つなぐ

期間：2011年12月2日|金|～2012年2月14日|火|
会場：無印良品有楽町2F ATELIER MUJI
入場料：無料

自然と共に生きてきた人々の冬の暦「冬至祭」。ヨーロッパとアジアに共通する「くらしの原点」を3部構成で辿ります。第1部は、ケルトや日本に共通の文化、「むすぶ」がテーマ。ケルト芸術文化研究の第一人者・鶴岡真弓氏と伝統文化や生命をテーマに活動している造形家・眞田岳彦氏が織り成す、参加型の展示空間です。

主催：無印良品
共催：多摩美術大学 芸術人類学研究所 (IAA)
編集・構成：眞田岳彦 (眞田造形研究所)

www.muji.net/lab/ateliermuji/